子ども農業体験活動コンクール2002

一人ひとりのこだわりを米袋に表現

ユニークなバケツ稲栽培とアイガモ・稲三同時作

農林水産大臣賞を受賞した東京・青梅市立河辺小学校の実践

「農業体験」といえば、比べ、稲ワラ、郷土料理などを素材に、さまざまな授業を展開することができる（『食農教育』二〇〇三年四月増刊号「バケツ稲12ヵ月のカリキュラム」参照）。受賞した東京都青梅市立河辺小学校の五年一組では、子どもたちが一人一バケツを担当し、土、肥料、水、農薬について、それぞれがこだわりをもって栽培活動を行なっていった。

たとえば、水やり。水道水では、プールに使われる塩素が多く含まれているからと、ある子は多摩川からペットボトルで汲んできた水を使い、ある子は浄水器を通した水を使い続ける。また家で魚を飼育している子は「汲み置き水」を使ったり、さらには、山間部に住むおじいちゃんの家に毎週通って沢水を汲んで育てる子もいたという。屋上は日当たりも強く、稲の成長が最盛期を迎える夏場には、水の減り具合も半端でない。そうとう本気で取り組まなければ、そんな手間をかけて育てられるものではない。

■食糧事務所の出前講座

こうして育てられた、子どもたち一人ひとりのこだわり米。担任の北村充全先生はできたお米を簡単に食べてしまうのではなく、東京食糧事務所の出前講座を呼んで、等級づけをしてもらうことを企画した。ふつう等級検査では、各生産者が検査場に持ってきた三〇kg入りの米袋からサンプルを抜き出し、粒の状態や水分量をチェックし、等級ごとにハンコを押していく。これにならって、子どもたちも自分のこだわりを表現した米袋をデザインし、検査官の人たちにせいいっぱいPRしたという。

「緑色の米が少しあるのが心配ですが、どうぞ一等をつけてください」「おじいちゃんの家の天然水で育てました。ぼくのお米をよろしくお願いします」。

結果、三等が三五人、二等が四人。食糧事務所の職員さんからは、今年は夏の高温がたたって東京の場合、田んぼでつくった農家でさえ一等米はほとんどでなかったこと、屋上でのバケツ栽培は高温になり、たいへん難しいことを教わったそうだ。

■ミニ・アイガモ稲作

そして、もう一つ。河辺小学校での個性的な取組みが、ミニ・アイガモ稲作。稲づくりを取り組むにあたって見たビデオ（『学校田でおもしろ稲作体験―アイガモと一緒に米づくり』）に子どもたちが感激して、自分たちもやってみたいと言い出したそうだ。そこで、バケツ稲づくりで間引きした苗を、理科で昔使われていた学校のミニ水田に植え直し、そこに大阪から取り寄せたアイガモ五羽を放すこととなった。

ところが、そうスムーズにことは運ばない。二〇日ほどかけて、育すう、水ならしを行なったが、ミニ田んぼに放飼したときに、一羽が衰弱死。そのほかも野良ネコに襲われたり、心ない誰かの仕業で石を投げつけられるなど、次々と死んでしまい、とうとうチョコボと名づけた五年一組の一羽だけが残った。一羽とはいえ、アイガモの除草・害虫駆除効果はバッチリ現われたそうで葉についたイネツトムシをパクパク食べる姿を子どもたちも興味深げに見入っていたという。

■命をめぐる議論が白熱

二学期には、動物の命について二度話し合う機会をもった。一度はアイガモが犠牲になったという現実と動物虐待について。そして、お役ごめんとなったアイガモを前に、食べるか、食べざるか……。激しい討論が行なわれた。チョコボの肉はスーパーの肉とどう違うのか？　家畜とペットの違いは何なのか？　食事のときの「いただきます」「ごちそうさま」の意味についてろうか。

食べる派一人、食べない派三九人。それぞれが深く考えた結論は、クラスのベランダでその後も飼い続けるというものだった。結論の是非はともかく、子どもたちなりの思考と論理を引き出したのは、「いままで手間をかけて自分たちで育ててあそぼうシリーズ」などの本であったそうだ。条件が悪くとも、やる気と工夫さえすれば、都会でもどこでもすばらしい教育実践は可能なのである。

ちなみに、北村先生自身も新宿生まれの新宿育ちで、農業体験はゼロ。地域で本気になって指導していただいた農家がいたわけでもないという。それでも、ここまで多様な授業を展開しえた教科書は、もっぱら『食農教育』誌や『そだてあそぼうシリーズ』などへの思いだったと、北村先生は振り返る。

＊

河辺小学校は青梅市の中心部、住宅街にある学校。米は毎日食べてはいても、稲の育つ姿などは見たことがない子どもたちがほとんどだ。都会の学校だからこそ、こうした学習が必要なのではないだろうか。

ベランダで大きく育ったチョコボ

▲はさみで収穫

蜻自分の米づくりへのこだわりを米袋に表現しアピールする

子ども農業体験活動コンクール2002の受賞団体紹介

学校内外の農業体験活動の推進・支援をはかるため、農業体験学習活動・支援活動の実践事例を全国から募集・表彰するコンクール（主催・子ども農業体験学習中央推進協議会・JA全中）。二〇〇二年度は幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校・専門学校・大学、個人・団体、JAの6部門に合計一四二件の応募があった。

青梅市立河辺小学校のほか、小・高連携による農業体験を多角的にすすめている山形県立置賜農業高等学校が文部科学大臣賞を受賞。他にJA全中会長賞2事例、子ども農業体験学習中央推進協議会会長賞6事例。

◆文部科学大臣奨励賞
山形県立置賜農業高等学校（山形県東置賜郡川西町）『地域と共に歩む～小・高連携の実現をめざして～』

◆農林水産大臣賞
青梅市立河辺小学校（東京都青梅市）『お米、再発見』

◆JA全中会長賞
JA北信州みゆき（長野県飯山市）『JA北信州みゆき「あぐりスクール」』
伊藤晴美、伊藤さなゑ（三重県桑名郡長島町）『こども体験農園すくすく』

◆子ども農業体験学習中央推進協議会会長賞
【幼保部門】風の子の家（静岡県焼津市）『「小さな農業者は働きものだ」～風の子の家の子どもたちと学ぶもの～』
【小学校部門】高畠町立和田小学校（山形県東置賜郡高畠町）『和田小食農教育プラン』
【中学校部門】江戸川区立松江第六中学校（東京都江戸川区）『学校農園から広がる世界』
【高校・大学部門】三重県立上野農業高等学校（三重県上野市）『農業体験学習プログラムの作成・配布・実施』
【個人・団体部門】子ども農業クラブ《わいわい耕作教室》（山梨県中巨摩郡昭和町）『スポ少もいいけどヒャクショウもね！』
【JA部門】JAみやぎ仙南角田地区青年部（宮城県角田市）『目黒区との交流事業』

※子ども農業体験活動コンクール2002受賞団体の活動内容については農文協のホームページをご覧ください。
http://www.ruralnet.or.jp/taiken2002/index.html

そばのまき方を小学生に教える置賜農高生

農文協 「総合的な学習の時間」の総合誌

食農教育

隔月刊（年7回・偶数月+増刊号）、A5判・160頁・定価800円（〒120円）年間購読料5600円（〒サービス）

「社会人先生」との連携を鍵に地域と結ぶ実践を紹介

食・農・地域というキーワードの連関のなかに「総合的な学習」の姿が見えてきた―全国の先行的な事例をとおして地域と連携した深い学習を探る実践情報交流誌。

【2003年5月号・No27】 ●800円
特集・地域みんなで校庭改造
〈大胆改造術〉校庭の裏地にハス田が甦る、校庭の小川づくり、ほか／〈プチ改造術〉食草を植えてチョウを呼ぼう、校庭のタネのいろいろ、ほか／〈授業活用術〉校庭の四季をまるごと味わう、ほか
●教材への切り口 カイコ

No25 特集・「ふるさと学習」の4つの手法
No24 特集・食と農でこんな力を育てたい
No23 特集・食で深まる国際理解
バケツ稲 12カ月のカリキュラム
No26 全国20校の実践からまとめた年間授業プラン。発芽実験から、メダカやスズメの生態、ワラ加工や紙すき、米の流通まで、栽培から食、環境、地域社会へと広がる大きな学習の扉を開く。 ●800円

4月増刊号

総合的な学習 CD―ROM
教科書のない「総合的な学習の時間」をどう組み立てていくか―事例1900と食・農・自然・環境学習の基礎情報を収録。 ●26250円
クリックしていくだけで、誰でも的確な情報へいきつける「ガイド機能」（学習素材別、フィールド別など）付き

【収録情報】雑誌「食農教育」19号分、「自然教育活動」43号分、「現代農業」連載・親子で発見・驚き農業実験など、農業高校用教科書11教科、単行本「学校園の栽培便利帳」、「学校園の観察実験便利帳」、「おもしろふしぎ食べもの加工」など、食生活推進コンクール、子ども農業体験コンクールの応募・収集事例649例、など

ご注文は 農文協（社団法人 農山漁村文化協会） 〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1 TEL.03-3585-1141 FAX.03-3589-1387 振替00120-3-144478 URL http://www.ruralnet.or.jp/ （価格は税込）